

巻頭言

現代宗教研究所所長 三原正資

人生八〇年といわれて久しい。しかし高齢者行方不明が問題となる時代にあつて、実り多き人生を全うするために、いかに生きていくべきかは、私たち自身にとつても、そして教化学にとつても重要な課題である。

人生八〇年時代の教化を考えると、その八〇年という数字が一致することから、ただちに脳裏に浮かぶのは天台大師の立てられた一代五時判である。これは大師が涅槃經の五味の譬え、華嚴經の日照の譬え、そして法華經の長者窮子の譬えによつて積尊一代、三〇成道八〇入滅の五〇年間の教化のすじみちを明かされたものである。

ことに私たちの場合、法華經信解品読誦のたびごとに、長者と窮子の間に交わされる会話や行動の妙味そして次第に醸成される信賴關係の形成に心打たれることも多いのではなからうか。例えば「窮子先づ其の価を取つて尋いでともに糞を除う」等の一節にするどい人間觀察を見出しながら、わが身を反省するのである。

宗祖は『開目抄』のなかで、この一代五時にふれられ、じつに味わい深い教えをのこされている。それは法華以前の四時の經教はすべて華嚴經を説いた大菩薩から習つたものであり、法華經だけが積尊独自の經であるというのである。(定五六七頁)

このことを私たちの人生に当てはめて考えることはおこがましいかぎりだが、人生五〇年あるいは六〇年を生きてきて、父母・師匠をはじめ多くの方々の影響を思わない人は少ないであろう。

そして、あなたの人生のかけがえのない意味は何であるか、と問われるとき、六〇歳、七〇歳からの人生の過程で、

どのような結果を招来できるものかどうかを思うと、楽しくもあり、恐ろしくもあるのである。

今年（平成二二年）六月の近畿教研では「生き残れるか仏教？」と題して、上田紀行先生のお話を拝聴した。その折りにもとめた『生きる意味』（岩波新書 二〇〇五年）のなかに「内的成長」ということが述べられている。

社会の中に「信頼できるもの」、「私をぜったい見捨てることのないもの」をどれだけ持つことができるか、そのことが私たちの「内的成長」を深く支える基盤になる。（二〇〇頁）

これを読みながら、教化とは、人の「内的成長」を促すことではないかと感じ、そして、そのためには教化者自身が「内的成長」によって人びとにとって「信頼できるもの」になることが必要なのではないかと、長者窮子の教えと合わせて反省した次第である。

「孝行したくなくても親がいる」とさえいわれる高齢化社会にあって、「無縁社会」を「仏縁社会」に導くための化学が求められている。